

『赤い銃火』

反戦反軍のアンソロジー『赤い銃火』が発行された一九三二年（昭和七）といえ、満洲事変の翌年、そして五・一五事件の年である。

太平洋戦争の無条件降伏に至る大戦争への突入が、国内に抬頭したファシズム勢力によって目睫の間に押しすめられ、のびきならぬ運命を民衆が強いられつつ、その成行に恐怖していたこの年に『赤い銃火』は刊行された。

国際革命作家同盟日本支部としての日本プロレタリア作家同盟の名による編集発行である。

「ここに納められた新作詩篇は、当面せる状況に対する、具体的には新たな戦争とそれを契機として強化しつつある労働階級に対する『ありとあらゆる暴力』を以てするところの資本の一方的攻撃——ファシズムに対する、わがプロレタリア詩人の断乎たる闘争の決意であり、全労働者農民の湧き上る進撃の歌声である。——」

という序文の言葉そのままに全一冊の各詩篇がことごとく反戦詩または反軍の詩であったことは、情勢緊迫のなかでの、この上ない激しい抵抗であった。

その筆者は十五人、楨村浩、村田達夫、中田亀之助、今野大力、田端春夫、大江満雄、野毛

九郎、一田アキ、野像掘哉、T・Y、田中英士、杉沼秀七、佐野嶽夫のほかに、姜鷺郷、蘆森堡という二人の中国人の名が並んでいた。『赤い銃火』という詩集名も亦、いかにも情勢の逼迫と、その下に沸々と上る反戦の意欲にふさわしかった。

昭和十年前のわが国では、治安維持法をふりかざした絶対権力が、国家体制への反抗的運動に、死刑をもって脅迫的に臨んでいた。なかでも反軍と反戦はいちばん目のかたきにされて非国民と呼ばれ、国民としての法的保護の埒外に置かれる扱いをうけた。そのまっ只中において、全冊を反戦詩をもって埋めたこの詩集の刊行は、その抵抗意識の猛烈さにおいて、凄絶としか言いようのないものであった。

すでにプロレタリア文学運動は、つぎつぎと中心メンバーの働き手を奪われ、ようやく最盛期を下ろうとしつつあり、逆にその国際的なつながりは強まろうとしていた。「国際革命作家同盟日本支部」という名称に、いわゆる左翼文学の、国際的な階級的連帯を誇示しようとする意気込すら見せている。そのような情勢の下で、この詩集もおそらく発禁覚悟の刊行であったであろう。従来、この詩集の名が強く記憶されているが、現存すること極めて稀少の事実、その間の事情が反映していると考えられる。

詩人ひとりにつき一篇、「召集電報」「出征」「見送り」「慰問袋」「母の叫び」等の題名の詩の内容を、この詩集から五年〜十年後の、あの長い戦争下の同じような題名の詩とくらべ

てみれば、このわずかな年月のちがいを越える、わが詩人たちの巨大な変転をいっそう切実に知れることもできるだろう。わが日本の詩人たちは「戦争」に当面しつつ、ほとんど同じ事実に立って一八〇度相反する二種の政治的な立場を示す詩群を持った、という歴史を背負っているのだ。

もちろん、この『赤い銃火』の反戦詩群は民族的記念の文学である。そこに詩人が自分の運命を賭けたたかいたががあった。参加した詩人たちは、そのために世間的日常生活にはきつとマイナスを得たことであろう。それほどこのことを想像させながら、やがてまた次の時期にこの中の詩人の幾人かが、愛国の認識をあやまり、好戦的な詩人へと変貌していった事実が存在している。それはまた、動かしがたい日本の詩人総体の、浅薄さを物語ってもしよう。

しかし、この反戦的アンソロジーが在ったという事実とその意義を、それが傷つけるなどということは、もちろん、あり得ない。

『戦列』

『戦列』は、反戦のアンソロジー『赤い銃火』を第一輯とする「詩・パンフレット」の第三輯である。この二つの詞華集の間に、第二輯『防衛』（一九三二・一一）があったが、これは発売

禁止とならなかった。

『戦列』が出たのは、一九三二年（昭・八）二月、第一輯から第三輯までが十カ月、かなりの積極さで刊行が続けられている。

『戦列』には、かつてない特徴が見られる。それはここに新しく参加した詩人たちの顔ぶれが、がらりと一新していることから窺われるが、中原亀吉、亀井勝一郎、小熊秀雄、松田解子、新井徹、多木要作、鈴木澄丸、細井敬、村田達夫、遠地輝武、樹木伸一、大道寺浩一という、十二人のメンバーは、ずいぶん新しくなっている。

既に紹介した数冊の「年刊プロレタリア詩集」に顔をみせているのは、松田解子、村田達夫ぐらいであって、プロレタリア詩運動の働き手であった新井徹、小熊秀雄、遠地輝武らの名は、ここでもようやく登場したという感がつよい。

そのことは、プロレタリア文学運動の活動の中から成長して存在を確固としてきた詩人たちがここで表面に出て、運動の中心になってきたという事情を語っている。この詩集の真の編集者がプロ作家同盟内の詩委員であったことが序文において明らかにされており、これを見てもプロレタリア文学・プロレタリア詩の運動が、ようやく峠を越えつつあることが、この詩集にあらわれている。新しい詩人たちの登場もそうだが、やかましく言われてきた「詩と政治」の問題に、ある一つの方向が見え初めた、そのことである。

「知られている如く、一九三二年の後半以来、我々の詩人たちはプロレタリア詩の一般的な沈滞の中にあって、それにうち克つための激しい苦悶を経験して来た。我々の苦悶は時々刻々に必要とされる新しい課題を、それとして歌い上げることの困難さに於て、我々がしばしば現実を機械的に図式化して来た欠陥から、如何に逃るべきかということにあった。——今この詩集を編し終って我々の感ずるものは、一九三三年の我々の新しい戦列が築かれはじめたのではないかと思われしめられることである。今までのプロレタリア詩に見られなかったタイプ——いわゆる叙情的なもの、諷刺的なものが加えられたからというのではなく、そうした新しいものを生み出したものの中に、われわれの新しい詩の戦列が築かれる要因を含んでいるのではないか——」という序言には、かなり思いきった転換がほめかされている。政治一辺倒から詩人の主体の発見、という方向である。

この方向にそって出て来た第一人者が、小熊秀雄だったのである。

冷血漢のように

ものを言わしてくれ。俺は

母親というものを知らない。

どういう形をしたもので

どういう風に、息子を愛するかを。
母の愛情にたいして
息子はどうか答えるべきかを

「母親は息子の手を」という小熊の詩の第一連には、階級的観点に立ちながら、なお詩人が自己を通してうたう、という方向が感じられよう。このことは、文学として新しい前進であるとともに、文学が政治に完全に支配されたことからの、無意識的な脱出方向が求められていたということである。

プロレタリア詩は、新しいこの『戦列』の示す方向によって進むべきであったが、階級的政治的なプロ文学としては、すでに峠を一步、麓に向けて踏みだしつつあったのではなからうか。

『無産者詩集』

一九二八年（昭和三）に全日本無産者芸術連盟静岡支部の名で発行された「無産者詩集・第

一輯」は下川儀太郎が発行編集兼印刷人となっている。その下川が、戦後静岡県から社会党代議士となり松本淳三の後を継いで一時社会党の文化部長となっていたことも記憶にある。

詩人としての下川は「プロレタリア詩人会」に属し、ナップにも加わり、昭和初期に盛んだったプロレタリア詩運動のなかの働き手の一人であった。

この詩集には、その下川をはじめ上野壮夫、馮乃超、北川英子、周民鐘、玉独清、早川竜二、針谷春子、鈴木友吉ら九人による十六篇の詩が集められ、当時プロレタリア詩人の代表的な一人だった上野は、おそらく下川との交友関係からここに寄稿したものと思われるが、その他は静岡地区で活動していた人たちであろう。中でも下川の詩四篇はそれぞれ百行を超える力作で、この当時の彼が情熱にまかせて書きまくっていたことを十分に思わせるものがある。

その時期のプロレタリア詩は戦闘的且政治的で、同志に呼びかけて、資本家階級を憎む思いをひたすら激しくぶちまけたからその詩の調子は、今になって読めばいささかならず空疎にひびくことを如何ともしがたいが、このような詩が官権から目のかたきにされ（この詩集も当然のように発禁となった）、それを覚悟の上で敢て地方でこれを刊行したほどの情熱は、五十頁に足らぬ小詩集から、溢れるほどの激しさである。

俺達の腕がうなるとき

俺達の眼が血走るとき

俺達の唇が裂けるとき

俺達はいつも此処へ投げ込まれる

血にまみれ、髪をかきむしられて

俺達が此処に投げ込まれるとき

そこには同じ血みどろの同志が

必ずや幾たりか力強い手を差しのべている

そして、そこに俺達が一団となり

又新しい血みどろの同志を迎える……

下川儀太郎の「留置場」という詩の第一連である。又か、といたいようなプロレタリア詩の常套ではあるが、当時誰も不思議としなかったかかたる状態―留置場と詩人たちとの関係は、今日においてこれを思えば恐るべき人権じゅうりんの世界でしかない。プロレタリア詩はそのような現実のなかで生産されたものだということを十分吞込んで、その歴史を顧るのでなければ正しい把握も理解も不十分となるだろう。彼らは文学的にも政治的にも過誤を伴っていたが、そのプロレタリア詩人の詩ほど一途な情熱をもってうたわれた詩はかつて、そして現在も

ない。太平洋戦争下の愛国詩は激しく血をたぎらせつつ歌われたかのようにあっても、比較して見れば、弾圧を覚悟せねばならなかったプロレタリア詩ほどの熱情をもってはいなかった。その理由は無産者という立場の自覚とそこから必然的な反抗を伴っていたからであろう。

もちろん、「うばわれた自由を／そのまま彼等に借しとくのか？／自分のものは／取りもどすんだ……／吾等の明日を／戦いとるんだ／今日の覚悟を／さあ。姉妹たち!!」（とりもどす自由・針谷春子）のようなアヂ・プロ詩は生産されすぎて鼻についた。下川の「留置場」は体験的であるが、この詩はまるっきり観念の押しつけであることに作者が気づいていない。プロレタリア詩運動はここから墮落のみちを辿りはじめたものであることを知っておかねばならない。

この詩集の中の三人の中国人のことは特に説明もなく、論者が死亡した今日となってはその関係を知ることとも困難である。

なお下川儀太郎はその後に『ピラ』（昭和五）という詩集があり、それも発禁である。

『労農詩集』

一九二八年六月、この巻頭に三好十郎の書いた序文がある。

この巻頭を飾る上田進の「一八七一・三・一八の巴里——叙事詩『パリコムミュン』第一章」は、一二一行に及ぶ長詩で、その最後の一節は、以下のようにうたわれている。

この喜びを全世界の同志と分けよう
この力を全世界の同志に自覚せよう
この確信を全世界にぶちまけよう
——パリ・コムミュン万才！
——パリ・コムミュン万才！
躍れ！ 歌え！
だが、Xを放すな！
Xは継続する
おい、第二のXに備えるんだ
おれたちは組織されねばならないのだ。
全世界の同志よ！
輝しきプロレタリアの旗の下に！
最後の勝利は俺たちのもの！

「支配階級の断末魔的焦燥は、三月の暴庄に於て、そのあますところなき凶暴さを發揮した。そして今度は、その同じ焦燥が、その悲喜劇的な『やぶれかぶれな』姿を、治安維持法緊急勅令の中に現わしている。われわれを取囲む風は益々強くなる！ この風の中で、われわれが止むに止まれず歌い出したこれらの歌声を、全日本無産者芸術連盟結成後の最初の詩集として、われわれは、われわれに許された限りの誇りと自信とよるこびで諸君に手渡す『奴等の鎖が』常に俺達と一緒にあるように、これらの歌は『俺達の行進曲』として常に俺達と共にある！俺達の戦いと共にある！」

三好十郎でさえもプロレタリア詩人としてこのような文章をかいた、いわば「戦意昂揚の季節」が、わが国の詩人たちの上に在ったのである。彼のいう「三月の暴庄」、すなわち「三・一五」の直後のことである。

この『労農詩集』第一輯には十二人の詩人の詩があつめられている。そのなかには上野壯夫、三好十郎、西沢隆二、中野重治、上田進、長谷川進、江森盛弥がいる。総じて彼らはインテリ詩人たちである。まだプロレタリア詩運動のなかに待望の労働者と農民の詩人が抬頭していなかった、初期の記念詩集であつたが、プロレタリア芸術運動の統一団体として、全日本無産者芸術連盟がこの年の五月に結成、その直後の刊行で、同年の『プロレタリア詩集・一九二二年版』との関係は今局外者にはよくわからない。

だが、その道は険しいのだ！

希望するものを遙かに望み見たときの勇躍する心がうたわれている。だが、左翼文学の苦闘はこれから後に、その急速につよく育ちゆく過程とともに、外からも内からも来た。

敵の弾圧と、内部的対立と分裂である。江森盛弥の「赤兵の歌」、上野壮夫の「戦争へ！」、波立一の「五月一日」、長谷川進の「とび魚運搬船」など、どの詩も明るく力づく、戦闘的で確信にみち、苦悩を宿していない。文学運動がマルクス・レーニン主義に組織的に統一された当初の前進の気がみなぎって、すこぶる明るい。後の時期の弾圧と後退の苦渋がないから、潑刺とした若々しい気配がこの詩集を特徴づけている。まだ左翼主義的政治的な指導方針が、それほど文学をしばりつけていなかった日のバラエティを、それぞれの詩人と詩がもっている。

その意味で、すでに紹介した年刊『プロレタリア詩集』や、その他の同系統の発禁詩集のなかでも、すぐれた出来栄であるかに思えるのである。

『アナキスト詩集』

この詩集が出来たのは一九二九年（昭和四）十八人の詩人の詩二十一篇が集められている

が、編者の鈴木柳介が、その当時のアナキズム系の文学運動にも詩人たちの活動にも、くわしく通じていなかったので、四十年後の今日では、はなはだ不安の思いはまぬがれがたい。

アナキストの詩とか、アナキズムの詩とか、その定義はやや困難であるが、プロレタリア詩運動の過程で、アナキズムとボルシェヴィズムの対立を通じて、大正末から昭和十年ごろまでが活動の時期であった。ところでこの詩集に収録された人びとの名には異議を感じずる人もいるだろう。たとえば秋岡潤一、高下鉄次、岡田刀水士、あるいは坂本遼、三野混沌などはアナキスト詩人とは言えない。

またその他の詩人たちも、一時の情熱から去ってしまっているが、その活動的だった昭和初期をとって考えるならば、萩原恭次郎、岡本潤、猪狩満直、金井新作、碧静江、小野十三郎、局清らの名はこの派の人というにふさわしく、さらに又幅をひろげて草野心平、竹内てるやら神谷暢までを数えれば、当時のアナキスト詩人は、ほぼ含まれるし、その人びとは全部この『アナキスト詩集』に集まっている。

この他、著名なアナキスト詩人の植村諦、伊藤和、坂本七郎は、その活動期が昭和五年以後に属し、さらにおくれて上村進、清水清なども登場するということになる。つまりこの『アナキスト詩集』は昭和四年に活動していたと見られるアナキスト詩人たちの小アンソロジーということができよう。そしてどういうわけか、このアンソロジー以外ではアナキストとして詩人的活

動をしていない人びとが混入しているのである。また「アナキスト詩集出版部」という発行名も、この一冊のみに限られている。

人間！

鋼鉄のタンクではない人間！

打ち勝つには余り弱かった君の意志 一人を英雄にし

一人を廃人にする恐ろしい刹那の試験だ。

仲間よ！

今同じ試験の刹那を前にして僕は君に心から手を差出す

黙って涙も出ない厳かな心で

君の狂った魂をかき抱く。

「狂った仲間」という金井新作の詩の終りの部分をここに示したのだが、この詩などにマルクス主義プロレタリア詩との根底的な違いを示す一つの性格が、はっきりしている。拷問に負けて狂気した仲間への言葉、打ち克つことのできなかった弱い意志と肉体を、さげすむというので

はなく、その事実を通して友を悼み、同時に拷問をもって臨む「権力」への憎しみをうたっている。もしプロレタリア詩ならば「拷問に負けぬ」「負けてはならぬ歌」を叫んだことであろう。アナキストの詩にはそうではないものがあつた。それは弱いのか？

その表面にあらわれるプロレタリア詩の非人間的なまでの反抗の歌は、人間の弱さを許容しないことにおいて、それはどうかすると権力に通ずる抜け穴をもつかもしれぬ。拷問に屈することは、この上なくかなしいことであるが、その怒りは敵に、拷問者、権力者に向けらるべきものである。同時に拷問者を憎みつつ、われわれが彼らにとって代るのではなく、拷問者の存在と、その存在をやむなくする時代と社会とを否定することのたたかいに進まねばならない。金井新作の詩の底にはそのような意味がひそみ、マルクス主義プロレタリア詩との抜きがたく深い相違を考えさせるものがある。

『南海黒色詩集』

これは昭和十年頃までの左翼系の詩のアンソロジーの多かった時期に、地方で刊行された、アナキズム系の詩集である。

白井冬雄（四篇）日野忠雄（二篇）宮本武吉（九篇）起村鶴充（六篇）井上弥寿三郎（九篇）

木原健（五篇）ら六人の詩を集めて、愛媛県松山市の新創人社から刊行された『南海黒色詩集』が発禁になったのは一九三二年（昭和七）の十一月、今から四十年近くも昔であった。

当時の多くの発禁本の運命のように、この詩集も亦少数部を送ったところで押えられ、ひろく話題となることはできなかったが、四国の松山あたりで、「文学」にこんな形ででも小さいながら黒旗が掲げられたのは、戦前としても珍しいことではなかったか。

ここに集まった詩人たちのうち、いま消息のはっきりしているのは、木原健（当時中学生）ただ一人である。木原健こと木原実（昭和四十二年一月、社会党から千葉県第一区に立候補して以来、現在当選二回の衆議院議員、戦前から新短歌運動に加わり、詩人木暮真人としては戦後もっとも早く出た詩誌『ユスモス』の有力同人であり、特に批評活動に力を見せている。その木原実が『南海黒色詩集』をめぐっての回想を寄せてくれた。

「昭和四年ごろ、松山市に第一芸術社という詩人集団があり、木原茂、木原良一、名本栄一らを中心にガリ版雑誌『黒林』を出していたがほとんど毎号が禁止だった。名本栄一は短篇の農民小説を書いて『新潮』の懸賞に当選したこともあり、その彼の詩集『飢えたる大地』が昭和五年に発売禁止を食い、同人たちも家宅搜索などやられて雑誌がつぶれた。後に『南海黒色詩集』の中心になった宮本武吉等はこのとき第一芸術社から分れた人々で、詩誌『防塞』を出す一方、地元の南海新聞紙上で活躍し、やがて仲間も出来て、アンソロジーをつ

くるまでの力を得たが『南海黒色詩集』の禁圧を最後として、戦前のアナキズム的傾向の詩人らの活動は、この地方ではおわりになったのではなかったかと思う。」

この言葉とともに、私が一度はその仲間たちから寄贈されていて第二次大戦の戦火で失ったまったく珍しい『南海黒色詩集』を、木原は寄贈してくれた。それによって私はこのみじかい文章をつづることが出来たのである。第一流の出来ばえとまではいえぬとしても、その紺地に墨色の刷りで、憤怒のこもった面だましいの文字など、戦闘的な感情にあふれていて、心づよいものが見える。この詩集が出た当時は、満洲事変、五・一五事件ごろで、軍国主義が表面に出て、自由を求むる精神の一切を許さなくなり、こんな傾向の文学活動にたいしては、地方都市ほど弾圧が急激だった。

「われわれと行を共にした幾人かの人達は昔日の勇敢さを喪失して生活的粉飾の中に逃避し、また思想的に墜落して行った。われわれはさらに戦いの道を突進せねばならない。——階級闘争を主張し、プロレタリア独裁を夢みるマルクス主義とは断然ちがう。個人の自由を蹂躪するマルクス主義とは断乎として敵対する。」

宮本武吉の名で巻末の跋として書かれているこの言葉は、資本主義とマルクス主義とに抵抗する、アナキズムの二正面作戦的な意欲を語っている。地方にあってこれほどの確に、そのころ多かった人道主義や農本主義的臭気もなく、アナキズムの立場から自由を叫んだ詩人集団は

他になかったのではあるまいか。

昭和十年以前には、いわゆるアナ系詩人の活動はかなり有力に、全国的ひろがりを見せていたが、一地方でこれだけ純一なアンソロジーが編まれた例もなかったようである。

全巻にわたる反抗的な調子もさることながら、日野忠雄の「出征兵士」宮本武吉の「北満葬送」をはじめとする反戦反軍の気構えが、大陸進出を焦眉現実の方針としつつあった日本国家の方針から、特に忌まれたことであろう。また起村鶴充の詩は反抗的な姿勢をテーマとしながら、このグループにただ一人の農民詩人であった。

さて、この短かい紹介文のおわりに筆者の希望を託しておきたい。一つは現在容易に入手のメドのない名本栄一の発禁詩集『飢えたる大地』を一見したいこと。二つには、第一芸術社同人の『南海黒色詩集』参加者の、その後と現在の消息に触れたいことである。

詩誌『黒林』や『防塞』等が、どこか古い仲間やその友人たちの手許に残存していないものだろうか。